

あとがき

思えば私は、作文の苦手な小学生でした。読書感想文や遠足の感想文を書くたびに、原稿用紙一枚を埋めるだけで一時間以上かかっていた記憶があります。何を書けばよいのか、どのように言葉にすればよいのか。白い原稿用紙を前に、途方に暮れていました。

そんな私が文章を書くようになったのは、医師になり、患者さんやご家族とかかわるようになってからです。治すことが難しい病を抱えながらも、今日一日を懸命に生きる人がいました。大切な人との別れを前にして、なお誰かを思いやる人がいました。言葉にならない苦しのなかで、それでも穏やかさを取り戻していく人がいました。

あまりにも多くのことを、患者さんにご家族から教えていただきました。その一つひとつを、自分のなかだけにとどめておくことができませんでした。誰かに伝えたい。苦しむ人の力になりたいと願う誰かに届けたい。気づけば、何冊もの本を書く機会をいただくようになりました。

この十年ほど、医学教育にも携わるようになりました。そのなかで、特に強く意識するようになったことがあります。それは、これからの医療を担う若い医師たちに、ホスピス・緩和ケアの本質を届けることです。

医師は診断と治療を学びます。病態を理解し、検査を行い、治療方針を立て、患者さんの命を救うために力を尽くします。しかし実際の臨床では、診断と治療に長けているだけでは、患者さんの力になりきれない場面があります。日に日に弱っていく患者さんを前に、何を話せばよいのかわからない。治療の選択肢が限られていくなかで、どの

ようにかかわればよいのかわからない。そのような苦手意識を抱く医師は少なくありません。

老いと喪失の時代にあって、診断と治療だけでは解決できない苦しみがあります。ACPも大切ですが、ややもすれば「治療を差し控えるための医療」と受け止められてしまうことがあります。では私たちは、若い医師たちに、ホスピス・緩和ケアの魅力を十分に言葉にして伝えてきたのでしょうか。

本来、ホスピス・緩和ケアは、何かをあきらめる医療ではありません。たとえ、いのちが限られるという解決が難しい苦しみを抱えたとしても、患者さんご家族が心の穏やかさを取り戻し、Well-Beingを実感できる可能性をもつ援助です。

そのことを、これから活躍する医師の心に届けたい。特に若い医師たちの心に、ホスピス・緩和ケアの火を灯したい。そう考えたとき、真っ先に頭に浮かんだのが羊土社でした。本書の企画を受けとめ、形にくださった藤澤 優さん、久本容子さんに、心より感謝申し上げます。

本書で紹介した内容を具体的に学び、指導医として次の世代や地域へ伝える「ユニバーサル・ホスピスマインド認定指導医制度」も設けています。関心のある先生方に、ぜひ学びの輪に加わっていただければ幸いです。

そして何より、私にユニバーサル・ホスピスマインドを教えていただいた、これまで出会った患者さんご家族に、深く感謝いたします。

本書が、治すことが難しい患者さんを前に立ち止まる医師にとって小さな灯となり、未来の医療を担う若い医師たちの行く先を、少しでも照らすことを心から願っています。

小澤竹俊